Osaka University Knowledge Archive

Title	発話の非流暢性に関する言語学的・音声学的研究
Author(s)	氏平, 明
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42007
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【10】

氏　　名	氏　平　　明（うじ　ひら　あきら）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　15103　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学　位　論　文　名	**発話の非流暢性に関する言語学的・音声学的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　土岐　　哲 （副査） 教　授　真田　信治　　助教授　青木　直子 審査協力者　東京学芸大学助教授　伊藤　友彦

論文内容の要旨

本論文は、音声学と言語学の分野から発話の非流暢性を対象とし、人間の言語能力の一端を実証的に明らかにしようとしたものである。104名の吃音者と290名の健常者から得た非流暢性サンプル約3,600例とその背景にある連続発話のサンプル8,500例を統計的に比較分析して、発話の非流暢性の蓋然性を明らかにし、そこに潜む非流暢性の言語学的・音声学的要因と発話産出のメカニズムを追究する。

第1章では、主に非流暢性に関する先行研究の動向と研究の意義・位置づけを述べる。音声学・言語学の分野での非流暢性に関する実証的研究は世界的に見ても稀であり、本研究の成果から非流暢性の要因や発話産出過程の一部が明らかになる可能性を主張する。

第2章と第3章では、日本語を母語とする吃音者と健常者に観察される同形の非流暢性について比較する。37名の成人吃音者の約1,300例、290名の健常者の約1,400例からなる非流暢性サンプルと、その背景にある各2,500例の連続発話サンプルを資料に、非流暢性の引き金の種類と分節の単位について比較した結果、吃音者は阻害音、とくに閉鎖音への移行で非流暢性を多発させるが、健常者にはそのような偏りがない。また非流暢性の分節では、共にモーラ単位の分節が多数を占めるが、健常者はその割合がより高くより安定した分節となっており、非流暢性の引き金の背後に潜む要因が吃音者と健常者では異なるとする。

第4章前半では、この非流暢性の引き金（変数）という考え方の元になった音声移行障害（Adams & Reis 1978）と音節構造仮説（Wingate 1988）を、後半では吃音者と健常者の非流暢性の要因が同一であるという潜在的修正仮説（Kolk & Postma 1977）に触れ、これらの仮説は第2章、第3章の結論を説明する上で不十分であることを指摘し、またこの章で音声移行障害の観点から、頭子音を繰り返す非流暢性を調べると無声音から有声音への移行で吃音が多発している結果も得ている点に注目する。

そこで第5章では吃音者による有声音の発声に焦点を絞り、その検証のために診断的研究を行なう。33名の吃音者と同数の健常者の病的音声を音響分析し、また一部の被験者については内視鏡によって声門検査を行なう。更に、非流暢性サンプルのアクセントのピッチ変化と非流暢性発生の多少の関連も調べた結果、吃音者には声帯の器質的な異常が認められないにもかかわらず、有声音の振幅に大幅なゆらぎがあり、ピッチ変化に伴なう非流暢性の多発が見られたことから、吃音者には喉頭の機能と呼気との連動コントロールに不全があり、それが非流暢性の発生に関与していることを明らかにしている。

第６章では、英語を母語とする66名の吃音者から得た、非流暢性サンプル約600例とその背景の連続発話サンプル3,000例を資料にして、日英語の吃音比較を行なった。非流暢性の分節単位に関して音節の構成要素（頭子音）の単位が半数近くを占めるものの、日本語の吃音のようにモーラ単位が多数を占める（80%以上）ことはない。しかし、非流暢性の引き金に関しては、日本語の吃音と同様な傾向が見られる。そして、第５章の結論と第６章の結果から、吃音者には音節の構成素を非流暢性の分節単位とする音韻符号化のステージで発生する非流暢性と、特定の引き金で誘発される調音実行過程で発生する非流暢性が存在するとの結論を導き出している。

第７章は、中国語の成人吃音者のケーススタディである。約300例の非流暢性サンプルと500例の背景の連続発話サンプルを統計分析し、また非流暢性のピッチの変化も調べている。その結果、中国語吃音の特徴は音節単位の非流暢性の分節が多いこと、音節の繰り返し部分では声調の未熟や誤謬による言い直しが大半を占めているが、これは声調言語の特性と喉頭の機能の不全が反映しているとしている。

第８章では、以上の議論をまとめて非流暢性発生の仮説とし、そしてKolk & Postma（1977）が引用した言語モデルには欠けていた音節と音節の構成素の節点を補足して音節の構成素の節点を音韻符号化の最終段階とし、より妥当性と整合性の高い日本語、英語、中国語の音韻符号化モデルを示して結んでいる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、音声学、言語学、心理言語学の知見に基づいて発話の非流暢性の要因に迫ることと発話産出プロセスの一部を明らかにすることを目的としている。成人吃音者104名、成人健常者290名から録音採取した膨大な資料を駆使して統計的に比較分析し、非流暢性を多発させている引き金を探索する一方、その背景を探るため音響音声学・生理音声学的な実験と調査も取り入れ追究した。その結果から、非流暢性の引き金の背後に潜む要因が吃音者と健常者では異なっていることを明らかにすると共に、吃音者には喉頭の機能と呼気との連動コントロールに不全があり、それが非流暢性の発生に関与していることを示唆した。また、非流暢性の引き金の普遍性と個別性に着目して日本語話者の他にも英語話者や中国語話者の吃音者による資料も分析し、吃音者には音節構成要素を非流暢性の分節単位とする音韻符号化のステージで発生するものと特定の引き金で誘発される調音実行過程で発生するものが存在することを明らかにした。加えて、先行研究のモデルには欠けていた音節と音節の構成素の節点を補足して、音節の構成素の節点を音韻符号化の最終段階とするなど新たな視点からなる幅広い議論を展開している。ただ、ここで示された理論をスピーチセラピーや発音指導に応用してその効果を検証するまでにはなお課題が残されている。音節構成要素が問題になるのであれば日本語資料の地域差の検証も避けて通れまい。中国語資料については、より多くの資料が必要であろう等の問題もあるが、それらは本研究の今後に対する希望であり願いであって、本論文の学位申請論文としての価値を損なうものではない。

よって、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。